

こんにちは！ 歴史資料室の鈴木です。

最近、全国的に進められているテレワーク。この「テレ」はギリシャ語で「遠い」を意味する tele に由来します。これに「音声」を意味する phone をつなげるとテレフォン。遠くまで音声を届けるテレフォンは、これに由来します。

先日、市民図書館で面白い本を借りました。日本電信電話株式会社広報部が企画・編集した『電話 100 年小史』という本です。この本には、明治 23 年（1890）の開業時の面白いエピソードや、その後 100 年の電話の歴史などが紹介されています。

発行された平成 2 年（1990）は、日本電信電話公社が民営化されて 6 年目。携帯電話はまだ小型化されておらず、外出先の人に連絡するにはポケットベルを鳴らし、テレフォンカード等で公衆電話からかけていた時代です。しかしながら、3人で通話できるトリオホンや、テレビ会議サービスなどが誕生しており、電話が変化し始めた時代でもありました。



むつ市のマエダ本店前に設置されている  
「デュエットホン」



深浦町の深浦交番附近に設置されている  
「デュエットホン」

※「デュエットホン」は、3人で通話できるトリオホンのサービスが誕生したことを受け、公衆電話でも3人で通話ができるようにと製造されたものです。

今回は、さらに時代を遡り明治時代の電話についてお話ししたいと思います。

明治 23 年、東京・横浜間において、日本で初めて電話事業が開始されました。

しかし、開業当時なかなか電話の便利さは理解されず、江戸時代末から明治時代にかけて日本で流行したコレラが電話で伝播するのではという人もいたとか。また、電話は高価であったため使い走りの小僧さんを雇う方が安上がりだとか、電話が普及すると小僧さんが失業するなどの意見もあり、開業時には見込より少ない加入者しか集まらなかったそうです。

青森県では、明治 38 年 10 月 15 日に、青森市の青森郵便局で最初の交換業務が始められました。これは現在の 47 都道府県のうち 22 番目で、東北の都市では宮城県仙台市に次いで 2 番目です。

この頃、青森市は戸数約 7,800、人口は 36,500 余に増加し、本州の海陸交通の要衝として、官公署の事務量や商店・会社などの取引が増加していました。そのため、商業関係者らは郵便や電報よりも便利な電話の開設を求めています。青森市では、明治 34 年にも市内および筒井村の電話架設と弘前・函館への長距離電話の開設を政府へ申請していましたが、このときは実現せず、同 38 年 7 月の申請でようやく認可されたのでした。

ただし、逓信省の予算が足りず軍用電話として架設されたため、当初の加入者は官公署や軍隊およびその関係施設、また軍隊が必要とする旅館や商店などでした。第 1 期の加入者数は個人および団体を含め 17 か所でしたが、同年末には 70 か所となり、やがて加入希望者はどんどん増えていきました。

この明治 38 年は 9 月に奥羽本線が全線開通し、翌 39 年には青森港の特別輸出港指定が決まるなど、物流の要所となった青森市にとって、この電話の開通は大きな強みになったことだろうと思います。

今回は、明治時代の青森市に公衆電話が誕生した話をしてしたいと思います。